大学生の外来語意識：外来語親密度や英語語彙サイズとの関係 *

河内　千栄子

要旨

本論文は大学生の外来語に対する意識を調査し、それが外来語に対する彼らの親密度や英語語彙サイズとどのように関係しているかを調べたものである。本学の 1~3 年生の 88 名について、国立国語研究所の報告（2004）をもとに質問項目を拡大し、計 23 項目について調査した。結果としては、外来語の見聞きの程度については 80% が日本語の中に多く見られると感じており、学生自身も 67% が外来語を使用していると回答した。今後外来語が増加することには 70% が好ましく考えており、2004 年の報告の平均と比べると、約２倍多く外来語が増えることに抵抗がないことが分かった。外来語の長所として「しゃれた感じを表す」が最も高く、次に「知的な感じを表す」が続き、外来語の短所としては「誤解や意味を取り違える」「相手によって話が通じなくなる」が挙げられた。長所と短所の平均点に有意差が見られ、学生は外来語に対して長所の方をより高く評価していた。外来語の弱点として「発音が異なる」点を強く意識していることが示された。日本語コーパス少納言から選出された低頻度の外来語 37 語に対する語彙親密度と意識調査との関係を見ると、「外来語の良い点」のみと有意な相関があった。また意識調査と学生の語彙サイズとの関係では、「外来語を使用する程度」「英語が好き」「英語が得意」と有意な相関が見られた。これらの結果をもとに、外来語を活用した語彙指導、語彙学習の教育的示唆をおこなう。

キーワード：外来語意識、外来語親密度、英語語彙サイズ、語彙指導

１．はじめに

私たち日常生活の中には外来語があふれている。約 30 年前の三省堂国語辞典における外来語の割合は 10.9% であったと示されているが、（石綿、1985）、最新の日本語コーパスの調査では、現代雑誌（2001 年 ~2005 年）の外来語の割合は 25.3% であることが報告されている（岩田、2015）。そして、外来語の 80% は英語の関連語

彙であり（Oshima、2003）、新聞に見られる外来語の 97% は英語を語源にするものであるといわれている（伊藤、1993）。これほど日常的に見られる外来語であるが、英語教育との関連については、さまざまな問題点がこれまで指摘されてきた（佐藤，1996; Shepherd, 1996; Simon-Maeda, 1995）。

外来語の問題点について Shepherd (1996) は主に次の 4 点を指摘している。まず、(1) 1 つの意味や使用に限られていること、(2) 短縮されていたり、他の語彙と結びつき意味が限定されること、(3) 多くの場合、他の語と連結してのみ使用されること、(4) 話し言葉と書き言葉で外来語の違いがあることである。また、このほかに本来の英語と無関係な和製英語（例：ナイター、マナーアップ）もある。

このように問題点があるとはいえ、外来語が学習者の英語語彙知識に大きな影響を与えていることも示されている。Daulton (2007) は、大学生の英作文の語彙レベルを調べた結果、86% が 1000 語頻度レベルで、そのうち 76% が外来語であり、また非外来語と比べると外来語の使用は約 3.2 倍であったったと報告している。実際、英語の高頻度語彙 2000 語の中には外来語が 38% を占めていることも報告されている (Daulton, 1998)。これらの結果から、学習者の産出語彙知識の中には外来語が大きな割合を占めていると言える。本研究では、このように英語学習者の語彙力にも影響を与えている外来語について、大学生はどのように意識しているのかを調査し、その外来語意識が、外来語に対する親密度や英語語彙サイズとどのように関係しているかについて分析する。

1.1 先行研究

外来語はカタカナ語として表されるが、そのカタカナ語と英単語および日本語のつながりは必ずしも意識していないようだ。しかし、いったん対象の英単語が「カタカナ語として日常的に見聞きすることもある」と言った情報を事前に与えると、学習者の産出語彙が有意に増加し、その効果は語彙サイズが高い学習者の方が、低い学習者より伸びが大きいことが報告されている (Kawauchi, 2014)。また、Kawauchi (2015) では、外来語と知らされぬままに半期 CALL によって語彙学習した学習者と、上記のような外来語であるという事前情報を与えた学習者との語彙産出には、ほとんど有意な差が見られなかったことが判明した。この結果は、英単語と外来語を意識的に結び付けることに効果があることを示している。しかし、Brown & Williams (1985) は、リスニングにおいてはこのような事前情報の効果が見られなかったと報告している。

外来語の影響は受容語彙知識を調べる語彙サイズテストにおいても見られる。既知

の外来語がテスト項目に含まれている場合、学習者の語彙サイズを過大評価してしまうこと、特に頻度が低い語彙レベルに過大評価が顕著に見られることが示されている（Elgort, 2012; Laufer & McLean, 2016）。Laufer & McLean (2016) は外来語が含まれた多様な語彙サイズテストにおいて、対応する L2 の語彙を書かせたり、L1 の意味を書かせるような難しいテストでは、多肢選択させるテストに比べより大きな外来語の影響があり、このことはヘブライ語母語話者より日本語母語話者に強くみられたと報告している。

このように、外来語が語彙の受容・産出知識に大きく影響を与えていることが示されるが、その他に、学習者が外来語についてどの程度の親密さを感じているかについても関係している。親密度とは「一般の人がある単語に対してどの程度よく見聞きすると感じているかその程度、すなわち単語のなじみ度を示す概念である」（横川 , 2006, p. 3）。Kawauchi (2017) は外来語の頻度を日本語コーパス少納言をもとに高頻度、低頻度に分け、それらの親密度（例：リスク）と横川（2006）における英単語（例：risk）としての親密度を較べた。その結果、外来語の頻度が高い場合、英単語として与えられた時より高い親密度が見られたが、頻度が低い外来語では有意差がなかったことが判明した。また、頻度が高い外来語の場合、2 シラブル以上の長い外来語の方が 1 シラブルの短い外来語より親密度が高いことが明らかになった。このように親密度が外来語の頻度や長さに関係があることが示された。

1.2 研究目的

外来語の親密度は、また、年齢、職業、性別などにも違いが見られる。国立国語研究所（2004）は、これまでなされた外来語関連の意識調査を報告している。この報告のデータの大部分は、1988 年から 2000 年にかけて実施された NHK の調査をもとにまとめられている。その中で、外来語の見聞きの程度、良い点、悪い点、英語との関係などについて、性別、年代、職業ごとに分析している（詳しくは後述）。顕著な点として、大学生（n=217）は外来語を「話が通じやすく便利である」、「新しさを感じさせる」、「しゃれた感じを表す」を選択する回答が最も高いことがわかった。外来語の悪い点は、「相手によって話が通じなくなる」「誤解や意味の取り違いがおこる」がすべての年齢、職種で最も多く回答されている。大学生と回答全体（N=3087）との大きな違いは、「読み方が難しくて覚えにくい」という質問が全体に比べ、大学生は約 12％低く、若者は読み方、覚え方にはあまり抵抗が無いようである。これらの結果から、大学生は外来語をそれほど否定的にとらえていないことがうかがえる。し

かし、外来語は中学・高校での授業の中ではほとんど言及されず、また言及されても「英語学習に役に立たない」と否定的に説明されていることが報告されている（Daulton, 2011）。

これらの外来語に対する意識は興味深い。なぜなら、今後増え続けると思われる外来語に対して、若者の外来語意識が英単語に対する親密さや英語語彙の学習、語彙の増加に何らかの影響があると考えられるからである。しかし、2004 年の国立国語研究所の報告では、データが 1988 年から 2000 年のもので古く、現代の大学生の外来語意識は不明である。もし変化が見られるとしたら、あるいは変化が見られないとしたら、どのような点であるか興味があるところである。2004 年の報告では、英語の好き・嫌いや得意・不得意についても述べているが、それらが外来語に対する意識にどう関係しているか報告されていない。また、外来語の意識が、実際の外来語に対する親密度とどのように関係しているかという研究もほとんど見当たらない。語彙サイズの大きい学習者は、外来語という事前情報が大きな効果があることが示されているが（Kawauchi, 2014）、語彙サイズと外来語意識との関連はあるのだろうか。本研究では、これらのことを念頭に次に示す 2 つの研究課題について調査する。

課題 1：本学大学生は外来語に対してどのような意識を持っているか。
課題 2：外来語の意識は、学生の外来語に対する親密度や学生の英語語彙サイズと関係があるか。

2. 研究方法

2.1 参加者

本学学生の 88 名から協力を得た。内訳は非英語専攻の 1 年生の 61 名、英語を主専攻あるいは副専攻としている 2~3 年生 27 名である。

2.2 調査項目

2.2.1 外来語意識調査

質問項目は国立国語研究所（2004）で報告された質問をもとに一部修正、追加した結果、全体で 23 項目になった（詳しい質問項目は後述）。2004 年報告による項目 1 の質問内容は、「読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語を使っている場合が多いと感じるか」となっており、あくまで、読み聞きの印象を問うており、実際に学生が「使う」程度を聞いていない。しかしながら、国立国語研究所の概要では、この質

問を自動的に「外来語を使う機会が多いかどうか」と議論されており、不明確であるために、本調査では新たに「自分が外来語を使う程度はどうか」を 1 項目追加している。3 項目目は「今後外来語が増えること」についての質問である。

これに続いて具体的な質問として、外来語の良い点について 7 項目、悪い点については 8 項目を聞いている。国立国語研究所の報告では、それぞれ良い点、悪い点と思う項目を複数回答させている。しかし本論では、学生のより詳しい意識を調査するために、各質問項目について、5 件法で問うことにした。本論では、また外来語の弱点として、日英語の違いによる発音、意味、文法の問題点を問う質問を追加した。全体的、および具体的な質問の後に「その他」として自由記述の 3 項目を設けたが本論では論じない。最後に 2004 年と同様に、英語に対して「好きか」「得意か」を聞いた。外来語意識調査は学期初めの第 1 週目に実施した。

2.2.2 英語外来語の親密度調査

対象となった外来語は 37 語で、次の 3 条件をもとに選出した。まず Standard Vocabulary List（アルク, 2010）の中から、①カタカナ語と日本語が共存していること (例：ギャップと gap)、②広辞苑にカタカナ語として定義があること、最後に③日本語コーパス少納言をもとに、1990 年代から 2000 年代に教科書、新聞、ヤフーブログの中で使用された外来語に限定し、その中から頻度が低いとされた外来語 37 語を使用した（Kawauchi, 2016)。

使用頻度が低い基準は、平均 62 回の出現（最大 142；最小 3）である。これは、高い頻度の外来語 (平均 582 回出現；最大 1359; 最小 340) に比べて約 10 分の 1 である。頻度の低い外来語に焦点を当てたのは、高頻度に比べて低頻度の外来語の方が、学習者の親密度の程度をより明確に表すのではないかと予想されたからである。対象の外来語を表 1 に示す。

表 1. 親密度調査に使用された対象外来語

1 シラブル	Phrase フレーズ , grip グリップ , rare レア , tough タフ , gap ギャップ , joint ジョイント , slope スロープ , flash フラッシュ , self セルフ , twist ツイスト
2 シラブル以上	function ファンクション , teaching ティ ― チング , lecture レクチャー , index インデックス , angle アングル , moral モラル , section セクション , visual ビシュアル , domestic ドメスティック , chemical ケミカル , dramatic ドラマチック , technical テクニカル , financial フィナンシャル , military ミリタリー , economic エコノミック , commercial コマーシャル , automatic オートマチック , academic アカデミック , document ドキュメント physical フィジカル , specialist スペシャリスト , creative クリエーティブ , negative ネガティブ , average アベレージ , supply サプライ , alarm アラーム , bitter ビター

それぞれの対象語彙について、下記に示すように横川 (2006) の親密度テストをもとに一部修正し、英語、カタカナ語、日本語定義を与え、7 件法で「見聞きの程度」を聞いた。親密度調査は学期末の 15 週目に実施した。

risk	リスク	危険、危険をおかす	1	2	3	4	5	6	7

2.2.3 英語語彙サイズテスト

学生の英語語彙サイズを調べるために、望月・相澤・投野（2003）のレベル 1（1000 語）からレベル 5（5000 語）を使用した。学期途中の 6 週目に実施した。

3. 結果と考察

3.1 大学生の外来語意識

外来語の全般的な質問として、「Q1. 日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に外来語を使っている場合が多いと感じるか」、「Q2. 日頃、自分自身は外来語をどの程度使っているか」「Q3. 今以上に外来語が増えることについて」の 3 項目を聞いた。表 2 は質問 1、2 の結果で、それぞれの選択肢を選んだ学生の割合（%）を示している。前述したように、質問 2 では本学の学生に対して彼らの実際の使用の程度を尋ねた。参考のために 2004 年に報告された国立国語研究所の学生の割合（以下 2004 年学生）と全体の割合（以下 2004 年全体）も示している。小数点第 2 位を四捨五入しているため、必ずしも 100% になっていない。

表 2.　外来語の見聞き、使用程度についての意識（%）

	Q1. 日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語を使っている場合が多いと感じることがありますか。			Q2. 日頃、あなた自身は外来語をどの程度使っていると感じていますか。
	本学学生	2004 年学生	2004 年全体	本学学生
めったにない	3.4	6.5	3.6	8.2
あまりない	17.1	17.1	13.4	24.7
時々ある	46.6	32.3	33.3	36.5
しばしばある	33.0	43.3	47.9	29.4
わからない	0	3.0	1.6	3.0
時々＋しばしば	79.6	75.6	81.2	66.9

見聞きの程度と実際の使用程度で最も多い回答は、「時々ある」の 46.6%～ 36.5% で特に、その違いは、見聞きするほうが 10% ほど高い。「時々ある」と「しばしばある」を合わせると、学生の 8 割近く (79.6%) が現在の日本語の中に外来語の使用が多くみられると感じている。また、学生自身も 7 割近く (66.9%) が使用していると感じている。

見聞きの程度については、2004 年学生、2004 年全体平均では、「しばしばある」が最も高く、本学学生と比べると 10%以上高い。しかし同様に「時々ある」と合計すると、本学の学生と 2004 年学生を比べると 4 % 増加している。2004 年全体では 81.2% で、2004 年学生と比べてこのように高い理由は示されていないが、おそらく若者より一般の人々は外来語をより敏感に意識しているのかもしれない。国立国語研究所の報告は 1988 年の NHK 調査に基づいており、現代のことばの急速な変化を考えると、外来語が多いと感じる傾向は今後高くなり、特に若者以外はより多いと感じるだろう。

次に、「Q3 今後外来語が増えることについて」の回答を表 3 に示す。
最も大きい割合を示したのは、「まあ、好ましいことだ」（45.2%）で、2 番目に大きい割合を示した「好ましいことだ」(24.7%) を合計すると、約 7 割（69.9%）に上る。2004 年全体を見ると、好ましい回答の合計は 37% となり、本学の学生は約 2 倍も高いことが分かる。

表 3. 外来語が今後増加することについて（%）

	Q3. 今以上に外来語が増えることについての意識		
	本学学生	2004 年学生	2004 年全体
好ましくない	4.1	2.3	13.3
あまり好ましくない	23.3	25.3	42.0
まあ好ましいことだ	45.2	48.8	29.5
好ましい	24.7	13.8	7.5
わからない	2.7	9.7	7.6
まあ好ましい＋好ましい	69.9	62.6	37.0

同様に 2004 年学生の合計の 62.6% より 7.3% 高い。反対に、「あまり好ましくない」「好ましくない」の合計は、27.4% であり、これは、2004 年学生とほぼ同じ (27.6%) であるが、2004 年全体では 55.3% にのぼる。このことから、一部を除けば、多くの若者は外来語が今以上増えることにはそれほど抵抗がないことがうかがえる。

Q4~Q10 は「外来語を使うことのよい点」について、それぞれ 5 件法（1: そう思わない ~ 5：そう思う）で聞いた。表 4 は各質問の回答率である。また 2004 年学生の結果を（% *）で示している。

表 4. 外来顔のよい点（%）

外来語の良い点 (2004 学生 %*)	1	2	3	4	5	4 & 5
Q4 話が通じやすく便利である (47.5%*)	2.2	14.6	32.6	30.3	20.2	50.5
Q5 新しさを感じさせることができる (34.1%*)	1.1	13.5	33.7	36.0	15.7	51.7
Q6 これまでなかった物事や考え方を表すことができる	1.1	12.4	36.0	37.0	14.6	51.6
Q7 しゃれた感じを表すことができる (33.6%*)	1.1	12.5	25.0	34.1	27.3	61.4
Q8 同じ意味でこれまで使っていた言葉の暗いイメージをなくすことができる	3.4	21.4	44.9	27.0	6.7	33.7
Q9 露骨な表現を和らげる効果がある	5.6	10.1	34.8	37.1	12.4	49.5
Q10 知的な感じを表すことができる (19.4%*)	1.1	12.4	32.6	32.6	21.4	54.0
各スケール平均 %	2.2	13.8	34.1	33.4	16.9	50.3

5 件法のため、3 を選んだ学生が多く、ここでは、3 を省き、否定的にとらえたスケール 1 と 2 の回答と肯定的にとらえたスケール 4 と 5 の回答を中心に見ていく。外来語の良い点として肯定的に見たものとして最も高い項目は、「しゃれた感じを表すことができる」で 4，5 の合計は 61.4％であった。全 7 問中、約 6 問はほぼ 50% 以上

であり、全体平均を見ても 50.3% となっている。学生は、外来語のしゃれた感じ、知的な感じ（54%）、新しい感じ（51.7%）といった印象を好意的にとらえているようだ。意見が割れたのは、「同じ意味でこれまで使っていた言葉の暗いイメージをなくすことができる」についての項目であり、肯定的な回答が 33.7%、1 と 2 を選んだ否定的な回答では 24.8% と最も高くなっている。外来語の良い点の 7 項目全体では、否定的な 1、2 の回答の合計平均は 16% であり、肯定的な 4、5 の回答の合計平均 50.3% に比べると約 3 分の 1 である。5 件法での全体平均は 3.49（標準偏差 0.58）であった。

2004 年の国立国語研究所の報告では、複数回答の方法を用いている。その結果を見ると、2004 学生が最も多く選んだ上位 3 位は、「便利である」(47.5%)、「新しさを感じさせる」(34.1%)、「しゃれた感じを表す」(33.6%) であった。大きな違いは、本調査では、2 番目に肯定的な「知的な感じを表す」が 54% であったが、2004 年学生では 19.4% しか選ばれておらず、約 35% の差が見られた。2004 年全体では 40% の差であった。おそらく、最近の IT やグローバル・コミュニケーションの急激な発展により、関連の語彙がカタカナで表示されることが多いことが一因かもしれない(毎日新聞, 2018 年 9 月 11 日, IoT に関する記事参照)。

Q11~Q18 は「外来語を使うことの悪い点」について、同様に 5 件法で聞いた。表 5 にそれぞれの回答率を示している。

表 5. 外来語の悪い点（%）

外来語の悪い点　(2004 学生 %*)	1	2	3	4	5	4 & 5
Q11 相手によって話が通じなくなる (41.5%*)	4.6	4.6	38.6	27.3	25.0	52.3
Q12 誤解や意味の取り違えが起こる (41.5%*)	3.4	10.1	28.1	32.6	25.8	58.4
Q13 日本語の伝統が破壊される　(31.3%*)	16.9	23.6	39.3	12.4	7.9	20.3
Q14 読み方がむずかしくて覚えにくい	3.4	23.6	38.2	24.7	9.0	33.7
Q15 正しい英語を学ぶ妨げになる	7.9	31.5	34.8	18.0	7.9	25.9
Q16 いかにも気取っている感じを与える	16.9	24.7	38.2	16.9	3.4	30.3
Q17 人を煙に巻いたりごまかしたりする時に使われる	21.4	22.5	42.7	11.2	2.2	13.4
Q18 軽薄な感じを与える	20.2	30.3	37.1	9.0	3.4	12.4
各スケール平均 %	11.8	21.4	37.1	19.0	10.6	29.6

良い点と同様に、外来語の悪い点について「そう思う」とするスケール 4 と 5 の回答では、「誤解や意味の取り違えが起こる」が最も高く 58.4% であり、次に「相手によって話が通じなくなる」の 52.3% であった。この 2 項目以外は、いずれも「外来語の良い点」と比べて割合が低いことが分かる。スケール 1、2 の否定的な「そう思わない」とする回答が多かったのは「軽薄な感じをたてる」の 50.5% であり、反対に、そう思うとする回答は最も低く 12.4%であった。学生は、外来語の誤解や意味の混乱を自覚している一方、軽薄さなどの印象はないと感じている。否定的な 1、2 の回答合計の平均は 33.2%で肯定的な 4、5 の合計平均は 29.6%であった。5 件法での全体の平均は 2.96（標準偏差 0.67）であった。

2004 年の報告では複数回答であるが、2004 年学生平均では、「話しが通じなくなる」と「誤解や意味の取り違えが起こる」がともに最も多く 41.5% が選択し、次に「日本語の伝統が破壊される」（31.3%）が続いた。日本語の伝統破壊については、2004 年全体でも 33.3% が選択している。しかし本学学生は、「そう思う」と回答した 4 と 5 の割合が 20.3% であり 10% 低い。また「そう思わない」と回答した 1 と 2 の割合が 40.5% であったことを考えると、本学の学生は外来語が日本語の伝統を破壊するとはそれほど考えていないといえよう。

5 件法による外来語の良い点の全体平均点 3.49 と悪い点の全体平均点 2.96 に差があるがどうか t 検定してみると、有意な差が見られた（t=5.65, p<.01, d=0.85）。このことから、学生は外来語全体に対しては好意的に認識しているといえる。

次に外来語の弱点として、本調査では、[Q19 意味]、「Q20 発音」、「Q21 文法」の 3 領域について 5 件法（1: そう思わない ~5: そう思う）で聞いた。回答率の結果を表 6 に示す。

表 6. 外来語の大きな弱点について（%）

外来語の大きな弱点は何と思いますか	1	2	3	4	5	4 & 5
Q19 意味が日本語と異なることがある	2.2	11.2	29.2	31.5	25.8	57.3
Q20 発音が日本語と異なることがある	3.4	9.0	19.1	40.5	28.1	68.6
Q21 文法が日本語と異なることがある	3.4	8.0	29.5	33.0	26.1	59.1
外来語弱点の平均	3.0	9.4	25.9	35.0	26.7	61.7

外来語の弱点では、「発音が日本語と異なる」ことについて、68.6% の学生がそう思うと回答し、最も高くなっている。次に、文法（59.1%）、意味（57.3%）の違い

を弱点だと回答している。全体平均では、約 62% の学生が外来語の弱点を認識している。特に発音が日本語と異なる点に高い認識をしていることから、今後の積極的な発音指導の有効性を示唆している。

最後に、「Q22 英語が好きか」、「Q23 得意か」についての結果を、2004 年報告の学生データとともに表 7 に示す。国立国語研究所の報告に合わせ、次の 5 件法で聞いた：1 非常に嫌い（不得意）；2 やや嫌い（不得意）；3 どちらともいえない；4 やや好き（得意）；5 非常に好き（得意）。本学の学生については、平均と標準偏差を注に示している。

表 7. 英語の好み、得意について (%)

	1	2	3	4	5	4 & 5
英語が好きか						
本学学生[1]	5.7	22.7	23.9	33.0	14.8	47.8
2004 年学生	10.6	23.0	20.7	32.3	12.4	44.7
英語は得意か						
本学学生[2]	22.7	31.8	35.2	10.2	0.0	10.2
2004 年学生	18.0	26.7	29.5	21.2	4.1	25.3

注 . 1 ＝平均 3.31, 標準偏差 1.12、2 ＝平均 2.33, 標準偏差 0.94

4 と 5 を選び「英語が好きだ」と回答した学生は本学では、48%、同様に「英語が得意」と回答した学生は 10.2% であった。2004 年学生と比べると、前者は 3.1% 高く、後者は 15.1% 低いことわかる。5 件法の平均をみると、好きかどうかの平均は 3.28（標準偏差 1.14）、得意かどうかは 2.33（標準偏差 0.94）であった。この 2 つの回答の平均点を t 検定してみると、有意な差が見られた（t=6.04, p<.001, d=0.91）。本学学生の約 5 割は英語が好きだが、得意だと認識している学生は約 1 割で大きな差があることがわかる。2004 年の学生は 25% が得意だと答えており、大きな開きが見られる。ただ、2004 年の学生の専攻や学年などは不明であるために比較は慎重にしなければならないだろう。

3.3 外来語意識と英語親密度および英語語彙サイズとの関係

まず、対象の 37 語に対する学生の平均の親密度（7 件法）、および語彙サイズの基本統計量を表 8 に示す。親密度に関しては、7 件法で平均 5.19、最頻値 5.65 となり、低頻度の外来語ではあるが、見聞きの程度はやや高いと言えるだろう。しかし最小値と、最大値の開きが約 4 あることから親密度に大きな個人差があることがわかる。語

彙サイズは平均 3,444 語、最頻値 3,166 語であり、高校までの学習指導要領による語彙数 3,000 語程度の受容語彙は習得していると考えられる。ただ、同じく最小値、最大値の差が大きく、学生の専攻の違いや個人差が大きいことが要因だと考えられる。

表 8. 低頻度外来語 37 語に対する親密度と語彙サイズ

	親密度	語彙サイズ
平均	5.19	3,444.10
中央値	5.27	3,333
最頻値	5.65	3,166
標準偏差	0.91	725.79
最小値	2.73	2,016
最大値	6.84	5,433

次に外来語の意識が、親密度や、英語語彙サイズとどのように関係しているか相関関係を調べた。外来語の良い点 7 項目と悪い点 8 項目に関しては、それぞれの全体平均値を使用した。その結果を表 9 に示している。

表 9. カタカナ英語の親密度、語彙サイズと外来語意識の相関分析

	親密度	良い	悪い	弱点	好き	得意	見聞き	使用程度	今後増加	語サイズ
親密度	1									
良い	**0.25**	1								
悪い	0.06	-0.01	1							
弱点	0.09	**0.25**	0.21	1						
好き	0.06	**0.33**	0.02	0.01	1					
得意	0.06	**0.27**	0.11	-0.03	**0.68**	1				
見聞き	0.06	**0.22**	0.09	-0.15	**0.44**	**0.33**	1			
使用	-0.0	**0.31**	0.07	-0.05	**0.42**	**0.35**	**0.55**	1		
増加	-0.08	0.20	**-0.36**	-0.17	**0.30**	0.11	0.16	**0.30**	1	
語サイズ	-0.01	0.10	0.20	0.02	**0.46**	**0.46**	0.17	**0.23**	0.11	1

ピアスン相関有意値 r=0.217, p=0.05

外来語の親密度は、唯一「外来語の良い点」と有意な相関（r=0.25）が見られた。このことは外来語を良いとする学生はカタカナ英語に対して高い親密度を持つ傾向があることがわかる。また、「外来語の良い点」は、「英語が好き」(r=0.33)「外来語使用」

(r=0.31) などを初め他の項目とも有意な相関が見られた。しかし、これらの相関はそれほど高い値とはいえないため、慎重に解釈しなければならないだろう。「外来語の悪い点」は「今後の増加」とのみ負の相関が見られ (r=-0.36)、納得がいく結果である。

語彙サイズは、「外来語を使用する程度」(r=0.23)、「英語が好き」(r=0.46)、「英語が得意」(r=0.46) の 3 項目と有意な相関が見られた。それほど高い相関値ではないが、語彙サイズが実際に外来語を使用する程度と相関があることは注目すべき結果である。また、語彙サイズが、学生の英語の好き・嫌い、得意・不得意と中程度の相関があることは、今後、学習者の語彙力を強化することによって、彼らの英語に対する自己評価を高める要因になることを示唆している。

このほかに最も高い相関 r=0.68 が「英語が好き」と「英語が得意」との間にみられた。英語の好き・嫌いが得意・不得意と強く関係していることは当然の結果であろう。2 番目に高い相関 r=0.55 が「外来語の見聞きの程度」と「外来語を使用する程度」に見られた。このことは、外来語を見たり聞いしたりする頻度が高いと、実際にそれを使用する傾向が高くなることが考えられる。そのような場合に、英語の本来の発音、意味や語用を示すことで、英語語彙の向上につながる可能性を示唆している。

4. 結論と教育的示唆

本調査は、本学の学生が外来語をどのように認識しているかを調べ、それが外来語の親密度や英語語彙サイズとどう関連しているかを分析した。参加した学生数が限られていること、高頻度の外来語は調べていないこと、性差や専攻の違い等を考慮しなかった点など限界はあるが、それでも興味ある結果が見られた。

外来語の見聞きの程度については、学生の 8 割近くが現在の日本語の中に外来語の使用が多くみられると感じており、学生自身も実際に 6 割以上が外来語を使用していると感じている。外来語が今後増えることについては、約 7 割が好ましいことだとしている。このことから、外来語を取り入れた授業展開には抵抗はないと思われる。たとえば、語彙学習や語彙強化、英作文や読解の向上のために外来語を効果的に取り入れることが考えられる。

外来語の良い点、悪い点の全体平均の比較では、良い点の方が有意に高く、外来語をより好意的に評価していることが分かった。外来語の良い点については「しゃれた感じ」、「知的な感じ」「新しい感じ」といった印象を肯定的に評価している。2004 年の国立国語研究所の報告に比べると「知的な感じ」が大きく伸びていた。外来語の悪い点については、「誤解や意味の取り違え」、「相手によって話が通じなくなる」が最

も高く、外来語の問題点を強く意識している。このことから、授業では、英文に見られる様々な外来語について、本来の英語の意味、曖昧な日本語の意味などを明示して、その違いに気づかせることが大切であろう。2004 年の報告と大きく違う点は「日本語の伝統が破壊される」という項目で、2004 年では 2 番目に選ばれたが、本調査では 5 番目であり、外来語が日本語の伝統に悪影響するとは強く意識していないようだ。

外来語の弱点では、「発音が日本語と異なる」ことを最も強く意識していることがわかった。このことは、今後、外来語を活用した積極的な発音指導が学習者の日英語の違いの意識を高め、リスニング、スピーキングなどにおいて有効であることを示唆している。特に学習者の興味に応じて、スポーツやファッション、IT などの分野における外来語を収集させ、その正しい発音、意味、使用法などのリストを作成、比較させることも有効な方法となろう。

研究課題 2 の結果からわかるように、外来語に関する様々な意識は外来語の親密度とあまり関係がなく、唯一「外来語の良い点」と相関が見られただけである。また、学生の英語の語彙サイズは「外来語を使用する程度」、「英語が好き」、「英語が得意」と相関があることが分かった。語彙サイズが、学生の英語の好き・嫌い、得意・不得意と関連があることは、今後、外来語を活用して、学習者の受容語彙、産出語彙能力を増強することで、彼らの英語に対する自己評価の向上につながることが示唆される。

鈴木（1999）は、外来語の使用ついてイデオロギーに基づく賛否を問う論争をまとめ、接触言語学の立場から、「外来語は「言語の代用による変化」の語にほかならない」(p.84）と述べている。言語現象を客観的にとらえることが重要で、「すべての言語は 1 つ以上の言語による混成の結果、形成されているので、外来語のない純粋な言語などない」(p. 86) と続けている。

最後に、本論の目的は日本語より外来語の使用を強く勧めることではなく、外来語であるメリット、すなわち「学習負荷」が軽減される点（Nation, 2001, p. 48）を有効活用して語彙力を増加、強化することである。私たちの日常生活で見られる多くの外来語を上手く利用して、正しい英語語彙の理解や英語コミュニケーションでの適切な使用を促進することは、今般求められている英語による発信能力の向上につながるのではないかと考えられる。

注

* 本論文は。2017 年大学英語教育学会九州・沖縄支部研究大会（宮崎大学）における口頭発表を加筆修正したものである。

参考文献

(1) 石綿敏雄（1985）『日本語の中の外国語』岩波書店

(2) 伊藤嘉一 (1993)「新聞の外来語分析 ―　英語教育への示唆」『英語論考』、24 号, 1-14.

(3) 岩田恭子（2015）『ネパール人日本語学習者のカタカナ語の学習ストラテジーと英語のかかわり』久留米大学比較文化研究科修士論文

(4) 国立国語研究所（編）(2004)「外来語そのものについての意義」『日本語の現在』http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/genzai/ishiki/1-1.html.

(5) 国立国語研究所（編）(2016)『現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon

(6) 佐藤貴美子（1996）「外来語と英語：意味用法のずれ」『盛岡大学英語英文学会報』7 号 , 53-63.

(7) 鈴木俊二 (1999)「日本における「外来語」観の変遷 ― 接触言語学の視点からの考察」『国際短期大学紀要』、14 号 , 27-94.

(8)望月正道、相澤一美、投野由紀夫（2004）『英語語彙の指導マニュアル』大修館

(9) 横川博一（編）(2006)『日本人英語学習者の英単語親密度』くろしお出版

(10) ALC. (Ed.) (2010). Standard Vocabulary List. Retrieved from http://www.alc.co.jp/eng/vocab/svl

(11) Brown, J. B., & Williams, C. J. (1985). Gairaigo: A latent English vocabulary base? Tohoku Gakuin University Language & Literature, 76, 129-146.

(12) Daulton, F. E. (1998). Japanese loanword cognates and the acquisition of English vocabulary. The Language Teacher, 20(1), 17~26.

(13) Daulton, F. E. (2007). Japanese learners' built-in lexicon of English and its effect on L2 production. The Language Teacher, 31(9), 15-18.

(14) Daulton, F. E. (2011). On the origins of gairaigo bias: English learners' attitudes towards English-based loanwords in Japan. The Language Teachers, 35(6), 7-12.

(15) Elgort, I. (2012). Effects of L1 definitions and cognate status of test items on the Vocabulary Size Test. Language Testing, 30(2), 253-272.

(16) Kawauchi, C. (2014). Receptive and productive knowledge of gairaigo: Word length, learners' vocabulary levels, prior information, and learning effects. Annual Review of English Learning and Teaching, 19. 1-16.

(17) Kawauchi, C. (2015). Effects of loanwords on productive vocabulary knowledge: Influences of loanwords frequency, length, learners' vocabulary sizes, and prior information. The Kyushu Academic Society of English Language Education, 43, 21-29.

(18) Kawauchi, C. (2017). Frequency, familiarity, and production of loanwords. Annual Review of English Learning and Teaching, 22, 19-34.

(19) Laufer, B., & McLean, S. (2016). Loanwords and vocabulary size test scores: A case of different estimates for different L1 learners. Language Assessment Quarterly, 13(3), 207-217.

(20) Nation, I. S. P. (2001). Learning vocabulary in another language. Cambridge; Cambridge University Press.

(21) Oshima, K. (2003). An overview of gairaigo studies: Implications for English education. Educational Studies, 45, 151-158.

(22) Shepherd, J. Q. (1996). Loanwords: A pitfall for all students. The internet TESL Journal, 2(2). Retrieved from http://itesl.org/Articles/Shepherd-Loan-words.html

(23) Simon-Maeda, A. (1995). Language awareness: Use/misuse of loan-words in English language in Japan. The Internet TESL Journal, 1(2). Retrieved from http://itesl.org/Articles/Maeda-Loanwords.html